

Teachers' 2026+

「子どもまんなか授業」

～主体的・対話的で深い学びをすべての教室で実現するために～

下越教育事務所

令和8年8月号

バックナンバーはこちら

→→→



Teachers' 2026 プラス4月号で示したように、当事務所では、「子どもまんなか授業」を実現するための過程を「学びの土台」「学びの自己調整」「深い学び」の3つのフェーズで整理しています。

日々の授業では、基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、見通しをもち、自分に合った学習方法や場を選びながら、自ら学びを調整していく力を育てることが大切です。また、個別最適な学びと協働的な学びを往還しながら、対話を通して考えを深める学びを充実させることも求められます。そのためには、今年度の Teachers' で取り上げている言語能力を授業の中で働かせ、自分の考えを根拠に基づいて表現したり、他者の考えと比較・関連付けたりしながら考えを更新することが重要です。

支援訪問等では、児童生徒が学びを自己調整しながら学習を進める授業や、対話を通して考えを深める授業が見られました。今号では、その実践例として、自己調整する学びに取り組む畑野中学校と、言語能力を働かせながら深い学びへとつなげる授業づくりに取り組む村上南小学校を紹介します。

1 佐渡市立畑野中学校の実践

自分で課題を設定し、課題解決に向かって学び方を自己選択しながら学びを進めていく授業へ



佐渡市立畑野中学校では、生徒が自ら課題を設定し、互いに学び合うことを通して、課題を解決する学びを進めています。生徒は、進度一覧表や振り返りシートを活用して「個別目標」を設定し、「自分で」「仲間と」「タブレットで」などの学び方を自己選択・自己決定しながら課題解決に取り組んでいきます。毎時間学習内容や学び方を振り返り、自分の学びを自己調整しながら単元のゴールに向かって、自ら学びを進めていく授業を目指して研究を進めています。

①生徒が主体的に学びを進めるための「振り返りシート」と「進捗一覧表」の活用

単元の節目の「節」ごとに使用している振り返りシートや、単元内における内容ごとの理解度がわかる進度一覧表をもとにして、生徒が主体的に学習に取り組めるようにしています。授業のはじめには、生徒が毎時間「個別目標」を設定して課題解決に向かいます。授業の終末には、学習内容の理解度、主体的に学習に取り組む態度や何をどのように学んだかなどの視点をもとに振り返り、学びを自覚したり、次の学習に生かしたりできるようにしています。

生徒が学習内容や学習形態を自己選択・自己決定できる授業を進めています。生徒が必要に応じて動画を見て課題解決につなげたり、様々な問題形式を選択できたりするように環境を整えています。

また、学び方を選択して、仲間と学ぶ際は進度一覧表を参考に学び合う相手を探せるようにしています。

教師は生徒に委ねるだけではなく、振り返りシートや進度一覧表をもとに生徒の学習を見取り、課題を焦点化して全体に問い返したり協働を促したりするなどの支援を行っています。また、「個別目標」を設定する際や「自分で」「仲間と」などの学び方を自己選択しながら課題解決に取り組む際にも一人一人の生徒にあった支援を行います。そうすることで、学習内容や学び方を振り返り、自分の学びを自己調整しながら自ら学びを進めていく生徒が育成されます。

「生徒が自ら課題を設定して解決に取り組む姿」や「生徒が個別と協働等の学び方を自在に選択して課題解決に向かう姿」等、生徒の「学ぶ力」の向上を目指して授業を行っています。

目指す姿に迫るために、進度一覧表を用いて、生徒と教師が単元のゴールを共有したり、個別の課題を設定して学びに向かわせたりしています。また、学びを自己調整できるように、今日の理解度や自分の学び方を振り返らせ、次時の学びへ生かせるようにすることもしています。また、授業中は進度一覧表などをもとにして、生徒同士の協働を促したり課題としたりするなどの支援を心掛けています。

このような授業を継続してきたことで、生徒が「自ら課題を設定して解決できる力」や「一人で解決できないことも学び合って解決できる力」等が少しずつ育ってきていると手ごたえを感じています。

これからも生徒が主役の授業の実現を目指して取組を進めていきたいと思います。

友達と話し合っ
て解けるようになった
問題がたくさんあ
った。また、過去
の自分を振り返
ることもできるので
とてもよい。

オンラインで授業を受けている私にも
分からない問題を丁寧に教えてくれる
からとても助かっています。



ノートをとるのは確かに覚えやすいけれど、人に説明をする方が覚えるのが速くなったからとてもやりやすい。

友達と協働で勉強することでやる気が出てがんばれる。数学は嫌だと思っていたけど、楽しくて数学が好きになった。

2 村上市立村上南小学校の実践

根拠を基に考えをつくり、対話を通して考えを深める授業へ

自ら学び方を選び、調整する学びは、学習内容の理解を深めることにつながる必要があります。その鍵となるのが「根拠をもとに自分の考えを表し、対話をとおして考えを深める」ことです。

村上市立村上南小学校では、子どもたちが、自分の考えを根拠をもとに説明し、対話を通して考えを深めていくために、三角ロジックの考え方を取り入れています。同校では、三角ロジックを「主張・理由・根拠」の構造として捉え、特に今年度は「根拠」を大切にし、根拠の質の高まりを主眼として取組を進めています。

〈村上南小学校の三角ロジック〉

村上南小学校では、三角ロジックを次のように定義し、授業を構成していきます。

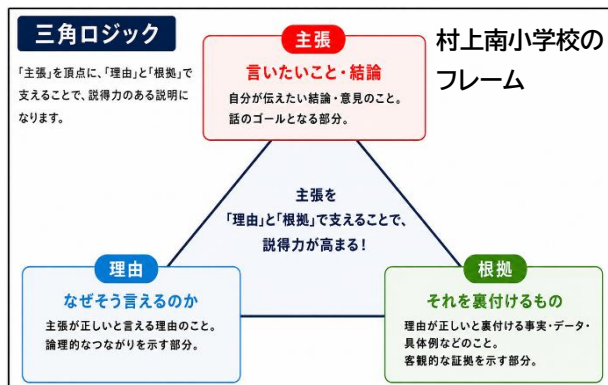
主張：自分の考え・結論
理由：なぜそう考えたのか
根拠：それを支える事実・資料・体験・データなど

このうちの「根拠」について、「主張を支える根拠が、事実をもとに吟味されている」とし、根拠の質の高まりを目指していきます。根拠を述べるだけでなく、根拠を比較・関連付け・選択しながら吟味していくことを大切にしていきます。発達段階や教科の特性に応じて次のような子どもの姿を目指しています。

低学年：一つの根拠をはっきり示すこと

中学年：根拠をもとに説明し、友達の考えと比べながら考えること

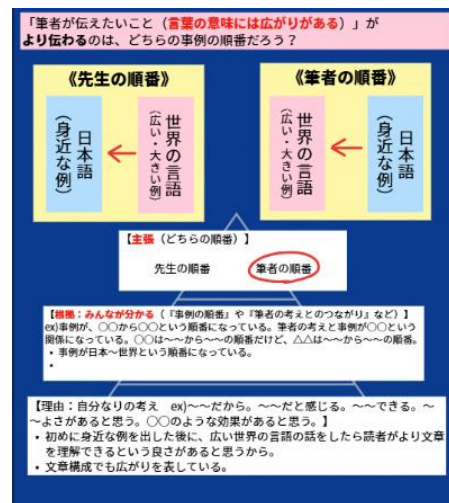
高学年：複数の根拠を比較・関連付けしながら、より妥当な根拠を選ぶこと



〈5年生国語科 説明文の授業〉

説明文「言葉の意味が分かること」の授業では、事例の提示順を比較する活動を通して、事例の順番には筆者の考えを効果的に伝える意図があることに気付き、その効果を根拠に基づいて説明する力を育てることをねらいとしました。そのために、教師は本文の構成と事例の提示順を並べ替えた構成を提示しました。「本文の方が分かりやすい」「逆の方が伝わるかもしれない」と子どもたちの考えが分かれ、「本当にそうだろうか」という疑問が生まれました。この疑問を基に、学習課題「どちらの順番の方が筆者の考えをより伝えられるか」を設定しました。

子どもたちは、ロイロノートを活用して自分の考えを三角ロジックのフレームに整理し、「主張・理由・根拠」を行き来しながら考えを明確にします。主張と理由、根拠のつながりが可視化され、根拠に基づいて考えを整理する姿が見られました。その後、友達との対話や、教師や友達との問い返しを通して、筆者の考えと事例とのつながりを比較・検討し、「事例の順番にはどのような意味があるのだろう」「なぜ筆者はこの順番で事例を示したのだろう」と問いを深め、それぞれの伝え方の効果を吟味しました。



児童がフレームに記入したもの



教師は、「どこからそう言えるの？」と根拠の吟味を促し、より納得できる説明へ高めます。

この検討をとおして子どもたちは、「より説得力をもって伝えるためには、読者や目的に応じて事例の提示の仕方を工夫することが大切である」と気付きました。そして、事例の順番は筆者が考えを効果的に伝えるために意図に構成されていることを実感し、論の進め方や構成の効果について理解を深めていきました。



児童の声

私は最初 A の考えでした。でも、根拠はどうだったか考え直したり、友達の考えを聞いたりしたら、B の考えに変わりました。

自分が見つけた根拠と友達が見つけた根拠を比べながら、こうかなあ、どうかなあと考えていく授業がとても楽しいです。

◆根拠をもとに考えを深める3つの視点

① 根拠を吟味し、考えを更新する

村上南小学校では、三角ロジックを「主張・理由・根拠」の構造として捉え、特に「根拠」を大切にしています。授業では、どちらの方がより筆者の考えが伝わるかを友達と対話する中で、子どもは自分の主張が本当に正しいかと疑問をもち、一度根拠に立ち戻る姿が見られました。根拠を再度吟味することで、最初の自分の主張を別の主張に変更し、より説得力のある説明へと高めていきました。

② 教師の問い返しから子どもの問い返しへ

子どもが自分の考えをより確かなものにしていくためには、根拠に立ち戻る経験が必要です。まず教師が、「どこからそう言えるの?」「その根拠だけで十分かな?」と問い返し、子どもが根拠を見直すきっかけをつくります。

その積み重ねにより、子ども自身も友達の考えに対して「なぜ?」「どうして?」「他の根拠はないかな?」と問い返すようになります。教師の問い返しから、子ども同士の問い返しへ。根拠を吟味しながら考えを深める学びが生まれます。

③ 問い返しを支える安全・安心な学級風土

問い返し合うためには、「間違ってもいい」「考えの途中でも話していい」と思える安全・安心な風土が必要です。授業では、相手の意見を否定するのではなく、「より納得できる考えをみんなでつくる」という姿勢で対話する子どもの姿が見られました。この学級の雰囲気、根拠を吟味する学びを支えています。

◆学校体制で取り組むロジックタイム

ロジックタイムは、決められたテーマについて、自分の考えを整理し、友達と伝え合う時間です。村上南小学校では、「自分の考えを相手に伝えるためには、理由と根拠を整理して話すことが大切」という認識を、教師と子どもが共通にしています。子どもたちは、友達に伝えるために、「主張・理由・根拠」を明確にして伝えようとします。学校生活全体を通して、思考を整理して話す力を育てています。

研究主任（授業者）の先生のコメント



本校では、根拠と理由を整理し、伝える力を育む時間として「ロジックタイム」を設定しています。初めは自分の考えをどう整理すればよいか迷いながらも、「相手によりよく伝えたい」と粘り強く取り組む姿が見られます。

身近なテーマで書くハードルを下げ、「考えを伝えたい!」と思える環境をつくることで、子どもたちは「すっきり整理できた」「よりよく伝えられた」という確かな手ごたえを感じています。



二つの学校の実践には、目的をもって他者と関わり、根拠を吟味して考えを深めるとともに、自分の学びを振り返り次の学びに生かす姿が見られました。まさに子どもまんなか授業の目指す学びです。2学期からも、子どもまんなか授業の実現を目指した授業づくりに取り組んでいきましょう。